

地球の危機、 それは人類の危機・・・ 今こそ共生の時代

「暑さ寒さも彼岸まで」とはよく言ったものです。やはり秋のお彼岸を境に、涼しい秋の気配を感じる様になりました。「涼しくなっただ」というよりも、肌寒い日もありますが・・・まあ今夏の暑さを思えば、本当に嘘のように過ぎしやすくなりました。

今夏は天気予報でも最高気温が35℃以上の日を指す「猛暑日」という用語が登場したくらい、酷暑でしたね。気象庁は8月16日に、埼玉県熊谷と岐阜県多治見で40・9度と、国内最高気温の記録を74年ぶりに塗り替えた日もありました。富山では猛暑日が14日間もあり、富山地方気象台が観測を始めた昭和14年以降最多だったそうですね。やはり地球の『温暖化現象』は否めません・・・。

『温暖化の恐怖』についての、テレビ番組を見ました。それによる

と地球の気温が1℃上昇すると、我々庶民の生活費も上昇・・・。生活費の出費が余計にかかると言っても、千円、2千円の騒ぎではないから大変です。ひと月になんと、16万円前後も生活費が加算されてしまうというデータになるそうです。真夏には欠かせないクーラーや、扇風機、あるいは洗濯機の使用回数といった電気代に始まり、農作物の成長が悪く、米や野菜、そして海水の温度が上昇することで、魚介類にまで影響を及ぼします。このままでは富山湾の宝石、「白エビ」も食べられなくなる時がくるかも知れません・・・(泣)。

その様に、海の幸・山の幸といった自然の恵みに多大な影響があり、私達の食卓にダメージを受ける事は、もはや免れない状況になるという恐ろしい予想がされています。とはいえ、日本はまだマシな国と言えるでしょう。

世界に目を向けると、あと2～3℃気温が上昇すれば、驚くことにその地域に住めない人々が存在しています。また、生活が裕福になるという理由で、例えば南米では、原住

民が自分達の伝統ある自然と共存した民族的生活を投げ捨て、アマゾンの中に、森林を切りひらいて石油工場を造り上げて労働している民族もいます。周知の通り、森林伐採は温暖化への1つの要因に挙げられています。伐採のみならず、二酸化炭素排出の根源である石油の採掘のためってというのが皮肉なものです。しかし彼らは、自分達の生活を快適なものにしたいという彼らの願望がそうしているのです。

かつて私達先進国の民族もそうだった様に、人類は理想と願望の中で成長発展してきました。歴史を顧みれば、イギリスで十八世紀後半に起った産業革命を端緒とし、人間はより良き物を求め、至便で効率の良きものを追い求め、現在に至っています。地球は大気汚染・河川汚濁・ダイオキシンの侵され、CO2排出による地球温暖化を引き起こしてしまっただけで、人類自身が作った悪業と言えるでしょう。もっと人間は控えめにならなければならなりません。生きとし生けるもの人間も含めて、皆平等という立場で物事を見るのが仏教であります。

私達人類の危機は、生きとし生ける動植物を含む地球全体の危機でもあります。もはや地球温暖化は、他人事ではありません。この危機的狀況を聞いて、何か自分に出ることはないのか？と、奮起しなければいけないでしょう。既に気が付いた人の中には「マイ箸」と言って、外食に行っても、お店に用意してある割り箸（森林伐採をして作っている）を使わずに、自分で持参していった箸を使用する人もおられますが、それも具体的に大事なことの1つでしょう。行動として現すことが何よりですが、行動するためには、その根底にある考え方や、心が最も大事だと言えましょう。

当ハンド仏句の愛読者なら、既にご承知の通りでしょうが、私達は「生かされて」います。生かされているという事は、この時間的・生命的に有限であり、かつ護られているということになります。その生きていくため、護られる為の原則として地球が存在しています。私達は紛れもなくこの地球の上で護られて生活しているのです。限

られた有限の時間の中で、私達は協力し合い、慈しみ助け合って、つまり「共生（きょうせい・ともいき）」しながら人生を歩まなければいけません。身近なところでの「共生」は家族に始まり、地域社会、引いては日本という国になるでしょう。グローバルな視点で世界的に眺めると、裕福な国と、貧しい国との「共生」に繋がってきます。

「共生」といえばお釈迦様の教えの根本です。しかも我が日本国は、稲作文化（農耕民族）を基盤とし、神道の教えでもある「草木成仏」を是とした、根っからの仏教国ともいえます。農耕をするためには大自然・大地に畏（おそ）れを抱き、対話をしなければなりません。

日本仏教の指導者の中で、我が日蓮聖人が唯一、地球・自然・国土と、どうお付き合いをするかを最も熟慮された方でもありました。日蓮三十九歳の時に幕府へ奏進された『立正安国論』が物語っています。まず我が国を正して立てることが、世界平和に繋がっていくという考え方です。国を立て

る為には、自分の心を立てる事が肝心である…。

つまり心と国土が対立的にあるのではなく、国土は心そのものであるという視座を持たなければなりません。「共生」という考え方の根底には「自分だけ」ではなく、「他人と共に」という、相手を思いやる、思いやりの感情が含まれています。

法華経第28章に「少欲知足（欲少なく、足を知る）」とあります。足ることを知るとは、欲をほどぼどにし、不平不満を持たず、心豊かに過ごすことです。心と国土、大地が対峙するのではなく、私達人間は傲慢にならず、大自然に畏敬の念を抱く時、初めてそこに自分は「生かされている」と、神仏を実感する事が出来るのでしょうか。

例えばお金があれば、ほとんどの物は手に入れることが出来るでしょう。しかし出来るならば『「生きた」お金の使い方』、あるいは『「生きた」時間の使い方』を考えて頂きたいのです。「お金はお金だ」と、そう言わずに、自分の為だけ、ではなくて、その中で他人の為、国のため、地球のために考えて頂きたいので

す。「共生」がキーワードです。

自分のことだけ考えている内は、本当の贅沢、本当の幸せを、恐らく味わう事は出来ないでしょう。どうか1人でも多くの方が、「全てと共にある。そこに生かされている」という気付きを得られることを…。

そしてそこに感謝する時、自分の振るまいが変わってくる事でしょう。私も忘れないように、心して日々の精進に励みたいと思います。

台掌 副住職 谷川寛敬